

1 派遣期日 平成28年7月17日（日）～7月18日（月）

2 研修先 学校名 筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>

3 研修内容

第54回『算数授業研究』の公開授業と講演会への出席による研修。

（1）テーマ

筑波流 アクティブ・ラーニングのすすめ

①アクティブ・ラーニングという言葉

平成24年8月28日の中央教育審議会の第82回総会において、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」で使われ始めた。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

②初等中等教育において

平成26年11月20日の下村文科大臣から中央教育審議会に出した「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」という諮問の中に、「アクティブ・ラーニング」という言葉が使われ始めた。

形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善に留まるものではない。

③「アクティブ・ラーニング」

子ども達の質の深い学びを引き出すことを意図するものであり、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習そのものの問い直しを目指すもの。

（2）授業参観

①第2学年 算数「かけ算」 授業者 田中博史
協議会①

②第5学年 算数「図形の面積」 授業者 山本良和
協議会②

③第4学年 算数「式と計算」 授業者 坪田耕三（算数部OB）
算数部OBによるシンポジウム

④第6学年 算数「円の面積」 授業者 盛山隆雄
協議会④

(3) 講演会

①「すべての子どもがアクティブになる算数授業のつくり方」 講演者 大野桂

形骸化した問題解決学習の問題点を登山に例えて述べてみる。

まずは教師が

「今日は、あの山を登ります」(課題提示)と、遠くから山を見つめる子どもに声をかける。

「いってらっしゃい」(自力解決)と、あとは個人の力量にまかせて登山開始。

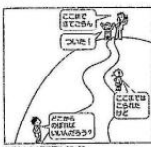
「今、どの辺ですか？」(発表及び比較検討)と、子ども達の個々居場所を確認する。

すると子どもから、

- ・「まだ登山口が見つからず迷っています」(解決に手がつけられない子ども)
- ・「登山を始めたところです」(稚拙ながらも絵や図を用いて解決に向かっている子ども)
- ・「いま中腹の急な坂道で大変です」(一般化に向かい模索している子ども)
- ・「もう山頂にいます」(形式的に解決している子ども)

という反応が、順番に子どもから返ってくる。

ここで教師は、山頂に到達した子どもの反応を取り上げ、「みなさん、山頂は眺めが素晴らしく、とてもよいところらしいですよ。」とその素晴らしさを登山途中の子どもに伝え、「みなさんそれぞれよくがんばりましたね。登山はここで終了です」と登頂していない子どもがほとんどだが、山頂の素晴らしさを全員に伝えることで授業終了となる。



○形式的に解決している子ども以外はアクティブではない。

○仲間の意見を聞いて、問題解決をした気にさせただけの子どもの存在。

○自力解決で自由にさせず、教師の都合で流れをつくってしまう。

→学級全員が助け合いながら解決する『ビルドアップ型算数授業』を目指したい。

◎教師が伝えたい方向へとスタートラインをそろえる。

◎全員が解決できる簡単なことは一緒にやる。

◎「これならできそう」「じゃあ、これもできそう」「だったら、これだってできる」を全員で。

②「協働的ってなんだろう」 講演者 夏坂哲志

○対等，対話，互惠性

○「クラスみんなが自分の味方」「どの子も主役」と思える学びの空間づくり。

○失敗も生かして、気づきを共有しながら、友達の思いを読み取りながら、少しずつみんなで前に進む。

○考えることをはっきりさせる。

○「決める」場をつくる。→一人一人が自分の立場を持つ場をつくる。→自分の問題にする。

○決めたら、やらせてみる。教師は付き合う。

○やってみた結果を話し合う。失敗も話させる。「なぜうまくいったか」「どうすればよかったのか」

○教師の主体性のもとで、子どもの発想を生かす。

③「算数的活動とアクティブ・ラーニング」 講演者 中田寿幸

○「分かりましたか」から「見えましたか」と言い方を変える。

○分からないときは分からないと表現できる児童，クラスの雰囲気づくり。

4 感想

筑波大学附属小学校の児童の様子は、公立小学校と比べてあまり変わらないように思えた。附属小と聞くと、学力が高くて立派な児童がいる場所という印象を持っていた。しかし、楽しい授業は楽しんで学習をするし、休憩時間になると、はしゃいだりふざけあったりするごく普通の児童達である。4年生でかけ算九九がうろ覚えという児童もいた。最も違うと感じた点は、授業内容と教師の目指しているところである。教科担任制で授業内容の質は高く公立学校での実践は難しいと思われるものもあったが、工夫すれば実践できそうなことや考え方が多くあった。自分自身、どんな児童でも、算数の楽しさが実感できるし、課題解決にアクティブになると信じている。それは教師の指導によって大きく変わると実感した。そして、この先進校等派遣調査を行って、教材研究の時間の確保と本当に楽しいと思える指導方法の検討が課題であると感じた。